

リハビリテーション科

近森リハビリテーション病院 院長 和田恵美子

リハビリテーション科医局

医師の移動としては亀田総合病院の専攻医大隈医師（2023 年 4 月～2024 年 3 月末 3 階東担当）、久手堅医師（2023 年 10 月～2024 年 9 月末 6 階東担当）、釧持医師（2024 年 10 月～2025 年 3 月予定、3 階東担当）の 3 名が赴任した。

また高知大学専攻医 1 年目の中嶋医師が 2024 年 4 月～9 月末赴任、3 階東担当、9 月～半年間大学に赴任、大学赴任中も二週に一度木曜日の午後に来院してボツリヌス治療をおこなった）。

そのため 3 階東和田（大隈退職後中嶋⇒釧持）、西松本、4 階西山本、5 階東日浦、西青山、6 階東中山、西久手堅医師（退職後 10 月より中山/青山）が担当した。

外来は月曜日山本、火曜日青山、水・木曜日和田、金曜日は月 1 和田・青山で書類外来を継続した。ボツリヌス外来のニーズ拡大のため臨時に対応をおこなった。

学生研修：11 名（高知大学 3、大阪医科薬科大学 4、群馬大学 4 名）

研修医研修：3 名（竹森菜咲医師、奥田光医師、佐々木康介医師）

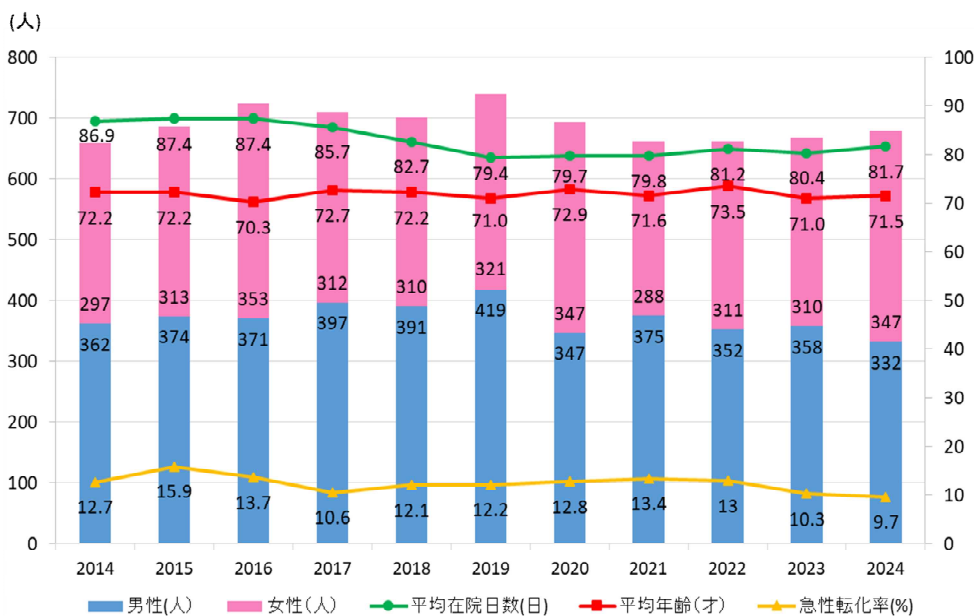
リハビリテーション病院

2023 年 3 月 15 日より 4 階東病棟を閉鎖しており継続している。4 階は西ユニットのみで運営。

医師体制強化加算が 2024 年 4 月より廃止。また看護師不足のため 4 階西病棟は閉鎖継続しており、その影響で 4 階病棟が入院料 3 となった（2025 年 4 月より変更予定）

年間退院患者疾患内訳

退院患者数の総数は 640 名であり 2019 年をピークに減少している。平均在院日数は 81.7 日であり、2019 年以降大きく変化がない。急性転化率は 9.7%と低くなっており、平均年齢 71.5 歳であり大きな変化なし。（図 1）



疾患内訳で脳血管疾患は 395 名、62%であり、大きく減少している。オルソリハビリテーション病院の体制変更に伴い整形疾患が 190 名と大きく増加した。しかしそれでも総数の回復は見られていない。近森病院からの重症患者を 2024 年より転院受け入れ制限しており、その影響もあり急性転化率は大きく減少している。整形疾患の受け入れを積極的に行っているが、脳卒中患者の数を補完困難で、総数に影響している。(図 2)

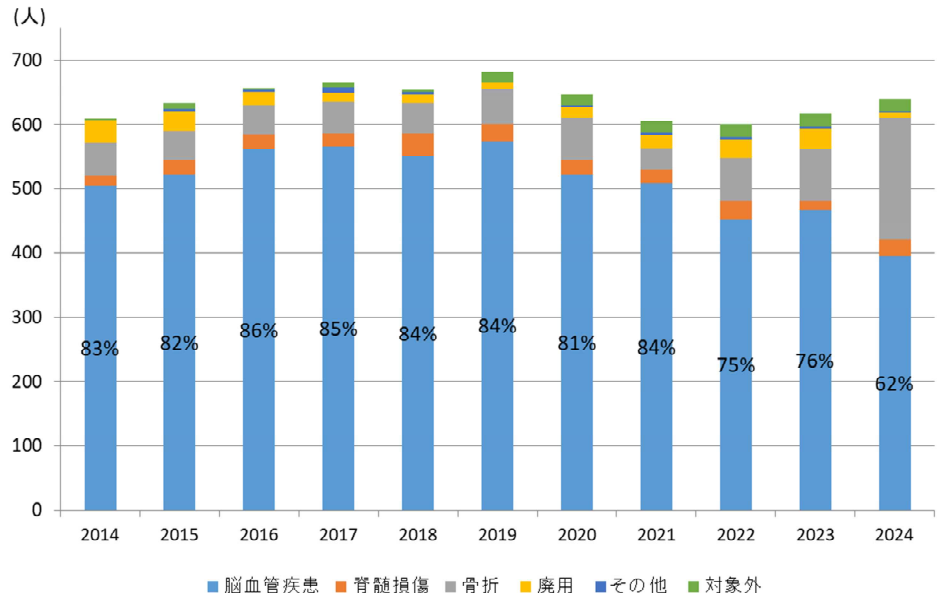
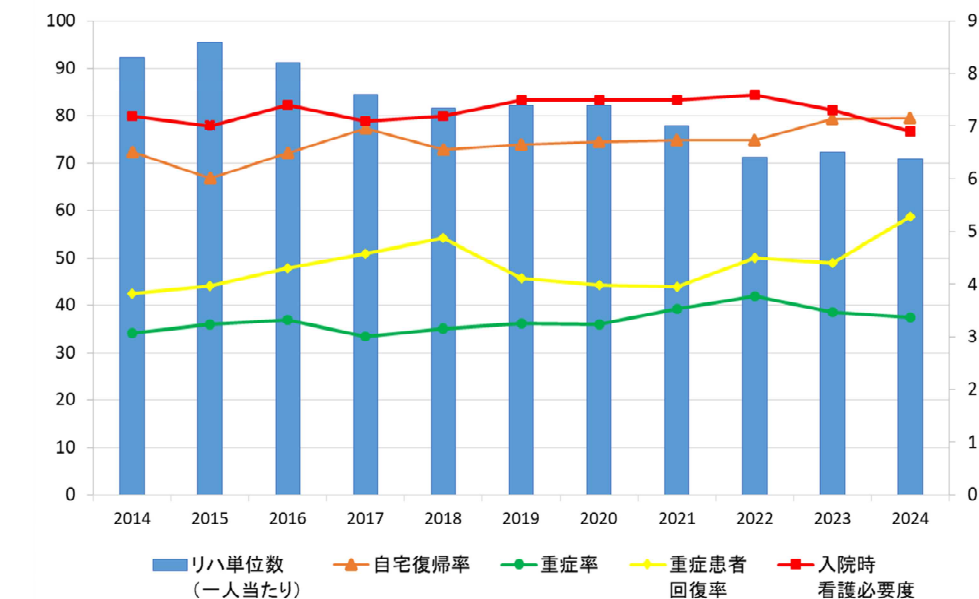


図2 年間患者疾患内訳 (新規入院患者のみ) 2014年～2024年

入院時平均看護必要度/重症率/重症患者回復率/リハ単位数 (平均) /自宅復帰率

入院時看護必要度は 6.9 と大きく減少している。しかし近森病院からの患者の重症度を除外しているため重症率は 37.4 と減少幅は小さくなっている。4 階病棟が入院料 3 のため病棟ごとではクリアしている。重症患者回復率は 58.7%と大幅に改善した。職員数の減少に伴い、またコロナの影響も認めリハ単位数は 7 を切り、6.4 となっている。整形疾患の単位数の上限も 6 単位となったためその影響もある。自宅復帰率は 79.4%と良好であった。(図 3)



	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
入院時看護必要度	7.2	7.0	7.4	7.1	7.2	7.5	7.5	7.5	7.6	7.3	6.9
重症率	34.1	35.9	36.8	33.4	35.1	36.1	35.9	39.2	41.9	38.5	37.4
重症患者回復率	42.5	44.1	47.9	50.9	54.1	45.7	44.2	43.8	50.0	49.0	58.7
リハ単位数 (一人当たり)	8.3	8.6	8.2	7.6	7.3	7.4	7.4	7.0	6.4	6.5	6.4
自宅復帰率	72.2	66.9	72.0	77.3	72.8	73.9	74.5	74.7	74.8	79.3	79.4
急性転化除外の自宅復帰率	(81.9)*	(79.5)*	(82.3)*	(86.4)*	(82.8)*	(84.2)*	(85.5)*	(86.2)*	(86.6)*	(88.5)*	(90.3)*

図3 各年の1月1日～12月31日退院患者より集計

治療成績

平均年齢は72.3歳、入院前期間は22.7日。入院期間は88.0日と維持している。入院時FIM72.7といままでよりも高い傾向であるが退院時FIM97.2とFIM gain24.6は維持できている。(図4)

	年齢		入院前期間		入院期間		入院時FIM		退院時FIM		FIM gain		FIM効率	
	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値
2014年(n=535) 急性転化(72人)	72.0	75	26.2	22	94.6	89	74.2	77	94.5	107	20.4	19	0.22	0.24
2015年(n=524) 急性転化(100人)	72.1	75	25.8	23	95.6	90	71.6	74.5	93.0	106	22.0	19.5	0.26	0.24
2016年(n=571) 急性転化(82人)	72.3	75	24.8	21	94.3	89	72.3	75	95.3	109	23.1	21	0.29	0.24
2017年(n=592) 急性転化(66人)	71.9	74	21.5	18	90.4	86	74.7	78	98.8	112	24.0	21	0.30	0.27
2018年(n=568) 急性転化(83人)	72.1	75	22.5	18	87.9	87.5	74.9	79	98.9	111	24.0	22	0.32	0.29
2019年(n=588) 急性転化(77人)	71.5	74	22.8	18	86.7	80	72.0	75	94.7	108	22.8	20	0.32	0.27
2020年(n=551) 急性転化(79人)	72.7	75	21.9	18	86.7	83	71.3	75	96.1	110	24.8	24	0.36	0.33
2021年(n=512) 急性転化(76人)	72.2	74	22.8	18	91.3	88	69.3	72	93.2	108	23.9	21	0.32	0.29
2022年(n=581) 急性転化(76人)	73.5	75	24.3	18	91.4	86	66.6	69	92.3	105	25.5	23	0.32	0.29
2023年(n=597) 急性転化(59人)	71.1	75	23.1	18	87.2	83	69.3	72	94.3	108	25.0	22	0.39	0.31
2024年(n=561) 急性転化(59人)	72.3	75	22.7	18	88.0	85	72.7	76	97.2	109	24.6	21	0.35	0.31

図4 各年の1月1日～12月31日退院患者(急性転化を除く)より集計

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
脳卒中患者におけるブリッジ空嚥下訓練 -食道期嚥下障害に対する有効性-	青山 圭、國枝 顕二郎、重松 孝、日浦 裕子、和田 恵美子、藤島 一郎	第 35 回 日本摂食嚥下障害臨床研究会	7/20～21 愛媛
がん患者の意欲が機能予後に与える影響	釧持 洋美	第 8 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会	11/1～3 岡山

講演

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
下肢装具を使いこなして、歩行障害を改善する (教育コース)	和田 恵美子	第 65 回 日本神経学会学術大会	5/29～6/1 東京
楽しさを見つける旅 回復期リハビリテーションの喜びと楽しみ (教育講演)	和田 恵美子	第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会	6/13～16 東京
地域における回復期リハの果たす役割 (シンポジウム)	和田 恵美子	第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会	6/13～16 東京

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
画像評価	釧持 洋美、小澤 理恵、宮越 浩一	総合リハビリテーション 医学書院	第 52 巻 第 12 号